

〔書評〕

藤原与一著

『方言学原論』

佐藤亮一

一 はじめに

書評の依頼を受けてから3年の月日が経過してしまった。これは、ひとえに筆者の怠慢によるものである。時宜を失したことについて、著者ならびに編集委員会、また、学会読者に対して深くお詫び申し上げる。

なお、小稿では、本書の著者については「著者」、小稿の執筆者については「筆者」の称を用いることにする。

二 本 論

本書は、これまでに、方言研究法ならびにその実践について数多くの著作を世に出している著者が、実践を通じてつちかかってきた自己の方言研究の理念を、あらためて思索し、著述したものである。

本書の構成は、およそ、以下に示すとおりである。

緒 言 「原論」の精神

序 説 方言の学とその構造——方言学体系——

第一章 共時方言学

第二章 通時方言学——方言地理学 その理念と方法——

第三章 高次共時方言学

結 説 方言学の思想

各章はいくつかの節に分けられ、各節はさらに中項目、小項目から成る。小稿では、各章・各節の概要を紹介しつつ、随時、筆者の感想もしくは考えを述べる。

緒言 「原論」の精神

ここで著者は、自己の「原論」観を記す。「〔原論〕は学の探求の高次化された段階で希求される」べきであり、自己にとっては「過大な要求」であるとしながらも、「原論」を志向せずにはいられない著者の情が語られる。

〈私は、青春の情をもって、「原論」を志向していきたい。言ってみれば、「原論」を幻想してもいきたいのである。〉(3ページ)

ここでは、また、著者の方言研究に向ける求道的な精神が語られる。著者にとって、学の探求は生活の探求である。学の道において理想とされるべきものは生活においても理想

### (30) [書評]『方言学原論』

とされるべきものである。生活全般の中に研究生活がある、言いかえれば研究生活を除いたその他の生活もある、というような二元的な立場を著者はとることができないだろう。

〈生活と研究との離反は、私として、堪えしのびがたいことである。(略) 学と徳との遊離は、私の遺憾とするところである。〉(4ページ)

生活を犠牲にしても研究に邁進する、研究こそが人生であるという研究至上主義をとる学者は世に少なくないだろう。しかし、著者の態度はそれとも違う。著者の求めるものは人生の探求であり、方言研究はそのための手段である、といっている言い過ぎであろうか。

#### 序説 方言の学とその構造——方言学体系——

ここでは、著者が従来から主張してきた方言学の体系、「Ⅰ. 共時方言学」「Ⅱ. 通時方言学」「Ⅲ. 高次共時方言学」の三本柱があらためて提示される。著者は方言研究は共時態の把握から出発すべきであること、共時態の各要素は現在から過去に向っての「逆視的な」通時論的考察の対象とされるべきこと、通時論的考察を経て捉えなおされた共時態が高次の共時態であると言く。

また、この章では、これまでの通時論的研究に対する著者の不満が語られる。すなわち、従来の研究(国語学では国語史研究)は変遷を追跡して、史的事実の歴史的展開は語らない、言いかえると、「歴史」と「変遷」とが区別されていないという。

ところで、著者は、通時論的考察に関して次のように言う。

〈通時相を見るのにも、私どもは、つねに共時相から出発していく。史実の順視的考察ということは、不可能であろう。順視しようとする私どもは、現在に立っている。現在から順視の初頭までは、ぜひ逆視しなくてはならない〉(13ページ)

「史実の順視的考察が不可能」とはどういう意味であろうか。「順視的考察」が「過去から現在に向っての史的考察を行うこと」と解するならば、これは文献国語史などがとる一般的な方法のようにも思われる。著者は、「共時態の要素を見貫く場合には、通時論的な研究ひいては言語地理学的研究が行われる」(12ページ)とも述べている。一枚の言語地図に盛られた諸事象(語形群)についても、逆視、順視のいずれもが可能ではないのか。しかし、ここで著者が言わんとするところは、「通時的考察は共時態の把握から出発する」ということなのであろう。調査を実施し、その結果を用いて言語地図を作成するまでの段階は共時論的な研究作業である。各時代の文献を渉猟して史的考察のための事例を集める作業も同様である。とすれば著者の見解は誠にもっともであるが、一方、「現在から順視の初頭までは、ぜひ逆視しなければならない」という記述は筆者の理解に不安をおぼえさせる。

従来の史的研究が個々の変遷を追うことに終始して、ダイナミックな日本語の歴史に迫ろうとしないとの指摘も、またもっともである。これについては、著者も言うように研究者の主体的態度の欠如が問題にされよう。現在の言語地理学が語史再構のための機械的な作業に終始しているという批判も本書の中に見られる。この点について、著者は先ず共時態の徹底的の把握が必要なることを述べている。『日本言語地図』は250の項目についての調査結果を地図化しているが、日本語の語彙史の再構のために、これで十分であるなどとはも

ちろん言えない。しかし、文献研究における語彙史研究の発展にも見られるように、研究者の主体的意識は変化しつつある。方言研究の分野でも、少しずつ、着実に著者の主張する方向に動きつつあるように思われるがどうであろうか。

## 第一章 共時言語学

この章では共時論的研究作業の第一歩としての調査法の問題が語られ、次いで共時論的記述の理念・方法が述べられる。

**第一節 方言調査** 著者にとって、調査は単なる資料収集のための作業ではなく、方言研究の根幹を成す行為である。調査という行為に研究者の全人格が投影され、また、調査行為を通じて研究者の思想が形成される。著者は、方言調査の根本は「誠心誠意法」であること、「調査する」という態度は「誠心誠意法」に反すること、対象の科学的認識の完璧な方法が自然傍受法であることを説く。

著者の提唱する自然傍受法という用語は広く知られている。しかし、その具体的な方法は著者の門下生以外には案外知られていない（筆者もかねて体験したいと思っているが、その機会を得ない）。この章では自然傍受法の実践が録音テープの文字化と、それに対する著者の解説によって示されており、たいへん有益である。自然傍受法とは、国立国語研究所がかつて松江で行った24時間調査のような、対象者の日常生活における全発言をそのまま記録しようとするものではなく、近年各地で行われている、地域の人たちに会話をしてもらってそれを録音し文字化するものでもない。知りたいことがらは事前に準備した上で、対象者との会話の中にそれとなく話題を提出し、その間に得られる特徴的な事象を極力採集記録しようとする方法のようである。しかし、この方法は、一般に行われている言語地理学調査のように、多数の項目についての事象を同一人物から得ようとするときには、おそらく不向きであろう。著者自身、たとえば『瀬戸内海言語図巻』作成のための調査では、一定の質問文による統一的な調査を行っている。しかし、その場合でも、用意した質問文を機械的にくりかえすような質問法は著者の忌避するところであろう。思うに、自然傍受法とは、すべての調査に機械的に適用される絶対的な調査法ではなく、あくまでも著者の調査理念を示すものではないかと筆者は理解する。

調査の場において、方言の話し手は調査者の質問意図から逸脱したおしゃべりをしばしばするものである。このようなときに、すぐれた調査者は話し手の自然な発話をさげぎるような行動は決してとらない。それが相手の人間性を無視した調査者の身勝手な行為だからというばかりではなく、雑談の中に、思わぬ方言事象があらわれることが多いことを良く知っているからであり、また、そのような情報を知ろうとつとめるからである。

**第二節 記述** 本節では、記述の理念・対象・方法が、方言の事実は生活の事実であるという方言観の下に語られる。著者は、生活とことばは対立概念をなすものではなく、「生活のことば」という一元の概念であると説く。この点に関して、筆者は、「ことば（言語形式ならびに言語行動）は生活の反映である」という二元的なみかたの下に、生活とことばとのかわりを考察するというアプローチもあると考えたいが、どうであろうか。ことばと

生活とを対立させない著者の立場から、近年盛行の社会言語学的研究がどのように評価されるか知りたいところである。

記述の対象としては、音韻・文法のほかに語彙の体系性を重視すべきこと、音韻体系・文法体系・語彙体系を分立させたまましておくことをいませ、それらを一体化してみるべきこと、そのためには、文表現本位の把握につとめるべきことが強調される。

文表現を単位としてことばを採集すべきであるという考えは、著者の言語観の基本を貫く思想である。ことばは常に文として表現される。これを切りぎんだ形で採集し、分析の対象とすることは、生命体の誤認につながり、言語研究を人間研究の次元から逸脱させると考えている。このような著者の思想は、ストレートに構造主義、技術主義、分析主義への批判となつてあらわれる。

〈言語研究上、文化・社会への顧慮の必要を言う人が、しばしば、言語研究上の技術主義者である。言語の外をもよく見ると言う人が、言語学上、いちじるしく技術主義的な作業をするのは、はなはだしい自己矛盾であろう。(略)構造主義の音韻分析が、はなはだしい微視分析になって、要素の関連と関連するものの内面性とに目を向けないのは、どういうことか。構造観の正しくは生かされていない構造主義があるのは、是認しがたい。〉(55ページ)

著者のこの発言は、果して構造主義的分析を全面的に否定するものであろうか。おそらくは、そうでないであろう。文表現本位の把握からスタートすることは構造主義の立場からも可能である。文を単位として第一次的に採集整理された資料は次の段階の分析を待っている。元来人間のいとなみは曖昧で混沌としており、一見無秩序な個性的なものである。この混沌としたものを抽象化して、人間の精神活動の所産である体系性を切りとってみせるのが言語研究の本質的な一側面であると思う。音声と音韻という対立概念もこの抽象化作業の結果生み出されたものである。そもそも、音声を音韻論的観点から把握するという過程を経ずして、言語(方言)の形式(語形・表現形式)を記述することが可能であろうか。ただし、徹底した構造主義的分析に見られるような、心理的要素を全面的に排除した分析法については、著者の立場からすれば問題もあろう。

**第三節 実践記述体系——生活語記述の体系——** ここでは、記述の体系的把握に関する具体例が提示される。記述に関しては、言語のもつ合理的な記述体系の構築と、感情的な価値の把握・構築をいかに調和させていくべきかが研究者の課題であり、なやみであると述べる。また、実践記述体系にしたがう研究者の心がまえとして、「記述対象との人間的な交わりに終始すべきこと」「どのような些事に関しても、記述者は驚嘆と感動の用意を忘れてはならないこと」「〈詩人〉と〈科学者〉が自己において止揚されるべきこと」「方言事象の記述が生活感情の記述であることに自信をもってあたるべきこと」「記述は〈説明〉ではなく、方言実相の提示(提出)であるとの態度をとるべきこと」などが主張される。

この「記述は説明ではなく提示であれ」という主張にも、著者の方言研究観がよくあらわれていると思う。これは、一見、記述に際して研究者の解釈が加わることをこぼむようにもみえるが、そうではなく、解釈した結果を、説明せずにそのまま提示せよということ

であろう。「言語のもつ合理的な側面を体系的に記述する」ことは、言語事象に解釈を加えることにほかならないと思うからである。もろもろの事象の中から研究者の求めるものを切りとってみせるという行為自体が解釈の加わったものであり、それに説明はいらない、ということかもしれない。「言語事象を網羅的に集めることには興味がない。事象をどのような眼でとらえるか独自の解釈をこころみることによるこびをおぼえる」という研究者もいるが、そのような立場は著者の否定するものであろう。

## 第二章 通時方言学——方言地理学 その理念と方法——

この章では、方言の通時論的研究は方言地理学によって行われ、それは方言事象地理学から出発して方言分派地理学へ、さらに方言周布論地理学へ展開するという著者の方法論が披瀝される。

**第一節 通時方言学の世界** 通時方言学の直接の対象は二個以上の方言から成る方言群落であるとする。これに対して、たがいに離れて存立する二個以上の諸方言に関しては(史的前後関係があることは必定であるが)通時論的考察は「単純にはいかない」としている。これは、方言の通時論的考察を地理的分布との関係(方言地理学、さらには方言分派地理学)から行おうとする著者の態度にもとづくものであろう。次の記述に見られるように、著者は比較方言学と方言地理学とを区別していない。

く方言に関する通時論的研究が、二個以上の方言の群落についておこなわれる時、比較方言学が成りたつ。——ここでは、比較言語学の名との対比において、比較方言学との言いかたをする。この比較方言学が、方言地理学とよばれてよい。(73ページ)

**第二節 通時方言学の二方向** 二方向とは、方言事象地理学の方向と、方言分派地理学の方向とである。著者の見解によれば、従来のいわゆる言語地理学ないし方言地理学は、ほとんどすべてが、この方言事象地理学の道を歩むものであるという。さらに著者は、従来の言語地理学の業績のほとんどが語史再構方向の作業であったこと、そこにはいちじるしい作業の機械化の傾向が見られることを指摘し、その客観主義、事物主義が人間不在の言語学につながることを強く警告している。

**第三節 方言事象地理学** 方言分派地理学に発展せしめるべきその前段階の研究であるとの位置づけの下に、調査および言語地図製作の理念が語られる。

先ず、調査結果の斉性(均質性)の重要性が述べられ、とくに複数の調査者による協同調査の際の配慮が強調される。その中で、「調査活動の基準線を、諸調査者を通じての資質最低線に置いて、成果の安全統一をはかる」という指摘は誠にもっともであり、学生などととも調査にあたる際にはとくに心すべきことであろう(これは調査結果を用いて言語地図を作成する際にも援用すべき考えであると思う。たとえば〔g〕と〔ŋ〕との区別ができない調査者の結果が混じっている資料から両者を出させた地図を作ることは無意味である)。

本節では言語地図製作についてとくに多くのページをさいている。これは著者が地図の製作を単なる資料作りとはみず、論文執筆と同レベルの研究表現そのものと位置づけているからである。地図にプロットすべき符号の作成・選定はそのための基本的に重要な段

階のものであり、著者はこれを「符号創作」さらに「創符」と呼ぶことを提案する。

地図製作のための分類作業にあたって心すべきことは「調査事項の全成果が過不及なくのせられることが必要である」とし、事象の統合（語形変種の統合）は禁物であると主張する。これは国立国語研究所編『日本言語地図』をはじめ、世に広く行われている言語地図作成法のいわば「常識」に対する批判となっている。

たしかに『日本言語地図』では、どの地図についても音声変種・語形変種をまとめて一つの代表見出し語形として示したケースがかなりあり、そのまとめ方の大小は地図の性格によって異なっている。

一般に、音声・語形変種をまとめる理由として、次の二つのケースが考えられる。

①言語地図は解釈の結果を示したものである。ゆえに抽象化が行われるのは当然であり、当面の考察の対象とならない変種は捨象される。

②変種があまりにも多いため、判型など出版上の理由のため変種をまとめざるをえない。

狭い地域の微細言語地図では①のケースが多いであろう。『日本言語地図』では①と②が混在しているが、どちらかといえば②のケースが多い。言語地図は資料図か解釈図かという点について言えば、筆者はその両方の性格を兼ね備えた図を作ることが理想的であり、それは可能であろうと考えている。本書の著者も「言語地図は解釈図である」と明言している（89ページ）。さらに「客観的な解釈図」であると主張する（91ページ）。客観的な解釈とは「個人が主観的な知力をはたらかせて解釈の行動にしたがうのではあるけれども、後日の多くの人々の自由な解釈行動を期待して、できるだけ、個人的判断の行きすぎのないようにすること」（92ページ）であるという。著者のこの考えに筆者は全面的に賛同する。これは日ごろの筆者の考えにぴったり一致する。

『日本言語地図』では②の理由によって止むを得ず大はばに変種をまとめたケースが多い。これは、地図と凡例とを分離して掲載すれば解決するが、この方法によれば、読者（研究者）に利用上の不便と多大の経費の負担を強いるであろう。現実にはなかなかむずかしい（われわれは、現在、文法事象の全国分布図を作成中である。これについては、事情の許すかぎり、上記の理想に近づけたいと願っている）。

また、著者は、語形間の差異の大小と、符号間の形態差の大小とは並行させなければならぬと主張する（88ページ）。著者はこの観点からも『日本言語地図』を批判し、例として「251 太陽」の図をあげる。この図の凡例の冒頭には次の語形とそれをあらわす符号が並んでいる。

- 7 HI
- ∨ HISAN
- ∨ HISAA
- ∨ HISAMA
- ∨ HIDONO
- ∨ HIDON （以下略）

この並べ方について、著者は、HI HISAMA HISAN HISAA という順序を提案しているが、なるほどそういう考え方もあろう。また、

HI

HISAMA

HISAN

HISAA

という図示法も提案しているが、同類と認めたものを視覚的にもそれらしく見せうるこの方法は、なかなか有益だと思う。

符号の与え方については、次のように言う。

〈HI は、7 の符号が与えられている。HI に対する HISAN は、∨ の符号が与えられているが、はたしてこれが適当であろうか。私なりの考え方をすると、HI を本体にとり、HISAN は HI に SAN という接尾辞のついたものと考えて、HISAN をあらわす符号は、HI の符号に何かをつけそなえたものとする。そういう点からも、私は、HI の符号を、もっと単直なものとしておきたいのである。かりに、HI を | であらわすとするか。HISAN は ⊥ とする。(略)。HISAMA は ∟ とされている。これは、HI の 7 と、符号間の類似が大きすぎるのではないか。〉(124 ページ)

この図で HI と HISAMA とに同形符号(の上向きと下向き)を与え、両者の差異を目立たせていないのは、HI は他の諸語形の中に点在するにすぎず明確な領域をもっていないからである。おそらく HI は文章語的な性格をもち、この図の中では文体的に異質のものであろう(それは、この分布が推定させるのである)。それに対して、~SAMA と ~SAN とは、それぞれの分布領域が明瞭である。この図では ~SAMA には縦向きの符号を、~SAN には横向きの符号を与えてある。それはヒ類だけではなく、他の類に対しても同様である。たとえば、OTENTOSAMA には Δ、OTENTOSAN には ∠ の符号を与えている。この方式は他の図にも及び、「252 月」では OCUKISAMA に | を、OCUKISAN に - を与え、「256 雷」では KAMINARISAMA に 9 を、KAMINARISAN に o を与えてある。その結果(「251 太陽」の図でとくに顕著であるが)、~SAMA が主として東日本に、~SAN が主として西日本(近畿・中国・四国)に分布し、九州では両形がそれぞれの領域をもちつつ分布することが一目の下に読みとれる(縦向きと横向きとは同じ符号でも分布差を目立たせやすいのである)。

「一定の分布のあるものに意味がある」というのが言語地理学解釈の原則の一つであると筆者は認識しており、『日本語地図』でもこの原則に従った解釈を行って地図を作成している。もちろん、語形間の形態差と符号間の形態差を並行させようとする原則は、これまた言語地理学における基本的なものであるが、前者と後者が衝突するときには前者の原則を優先させるという方法が『日本語地図』ではとられている。語形と符号との形態上の関係を厳密に一致させようすると、符号の形態がきわめて複雑になり(それは語形の形態が複雑なことの反映でもあるが)、見えるべき分布が見えてこないおそれがあるのではないか。筆者は、いま、どちらが良いと断言するつもりはない。これは、言語地図にとどまらず、数量的資料を用いてグラフを作成するときなどにも認められる、抽象化・解釈とは何

かという問題であろう。結局は、言語地図は何のために作るのかという根本的な問題に帰ってくるのである。

さて、ここで規定の紙幅を越えてしまった。以下は、各章・各節で述べられていることからのうち、とくに筆者がコメントしたい部分を中心に記す。

**第四節 方言分派地理学** 方言分派とは何か。それはいかなる手順によって認定されるものか。著者は次のように言う。

〈方言事象の諸多のものに、分布の一定傾向が認められるようであれば、私どもは、そこに方言分派を認めることができる。方言分派地理学の第一手順とすべきは、個々の方言事象分布を追求して、それから、なんらかの傾向を帰納することである〉(98ページ)  
このようにして帰納された「方言分派」は「方言区画」とどこが違うのか。この点に関して、著者は「区画は静的な存在」であるのに対し、分派という概念には「動態観」が内在しているという。中央から周辺に伝播した語が、自然の理(地勢・気象)に従って相似た分布傾向を示し、等語線の束を作る。この等語線の束という考え方が、基本的に方言分派という観念に通ずるのだという。

ここに明らかなように、著者のいう「方言分派」とは言語体系としての方言ではない。方言区画設定には「①方言間の体系的な差異(の大小)に着目して境界線を設定する」という方法と、「②個々の事象の分布から等語線の束を帰納する」方法とがあるが、本書では①の観点は全くとらない。言語変化には内的変化による体系的な変化(たとえばアクセントにおける類の統合、音韻/シ/と/ス/、/チ/と/ツ/の統合)と、外的変化による個別の事象の変化(たとえば隣接地域からの伝播による新語の受け入れと旧語の廃棄)とがあるという観方があるが、著者の方法はもっぱら外的変化の側面からの方言(方言事象)の歴史性(方言内の各事象の古さ、新しさ)をみようとしているようである。

**第五節 方言周布論地理学** 方言分派は周布の理によって醸成されるという考えが示される。すなわち、方言分派は隣接地域からの事象の伝播という外的影響によって形成されるという考え方である。どのような道すじからの周布によって分派が醸成されたか、これを解明することが著者のいう方言周布地理学である。ここではいくつかの具体方言について周布論的考察の事例が示される。

**第六節 日本語方言分派系派論** 『日本語地図』などを資料として、全国的視野から方言周布論地理学の実践が行われる。

まず、全国的分布の類型として「全国周布」「近畿中心の放射伝播」「辺境残存」「辺境改新」の事実が指摘される。「辺境改新」は辺境地域に伝播した語形が独自の変化をとげるものであるが、これについての伝播類型論的指摘はこれまでにあまりないだけに興味深い(『日本語地図』を見ると、中央から地方に伝播するにつれて次第に語形が変化していく例は非常に多い)。

次に、特定地域に分布するものとして、「東西分派」「裏日本分派」「東北と西南の一致」その他を指摘する。「東北と西南(九州南部から琉球列島にかけて)」の一致については、ここ



に「あい対立する【東北と西南】対応分派を認定することができる」という。この記述から、著者の考える分派は「等語線の束によって区画される地域」だけではなく、「分布の類型」の概念をも含むことが分かる（「東西分派」という概念もそうである）。しかし、「裏日本分派」や「九州分派」などと「東西分派」や「東北と西南対応分派」などとでは「分派」のとらえ方の次元が異なるのではないか。筆者は、前者を分派、後者を別の用語（たとえば「分布の型」）で呼んで両者を区別した方が「分派」の概念が明確になると思うが、どうだろうか。

なお、本節の末尾で、著者は、周布論は文化伝播理論であり、国語史研究は日本生活文化史研究と一致せしめるべきものであるという、スケールの大きい提言を行っている。

### 第七節 日本語の成立とその周布発展——地方生活語圏の形成（日本生活語圏史）——

ここでは、全国に日本語が拡がる以前の日本語の成立のプロセスについて著者の仮説を述べる。すなわち、「近畿方言」的なものが西から東へ進入したこと、その際に九州や中国地方などでは「反立的な勢力」が強かったために近畿方言の特徴が変質し、その勢力が比較的弱かった四国地方では近畿方言的な特徴を受け入れた、などの説を述べている。これは言語基層説を基本におく諸方言成立の大胆な仮説である。

## 第三章 高次共時方言学

紙幅の都合で、この章の紹介はごく簡潔なものとする。

第一節では、方言分派論にしたがって方言地理学を実践していくと、自然に方言通時態を見とおした高次共時態の認識に達することを述べる。

第二節では、記述すべき体系として、「統合の記述体系」「特性論」「歴史的法則の樹立」の三つが掲げられる。「統合の記述体系」では、事象相互の関連について統合的な通時論的解釈（将来への展望を含む）の必要性が述べられる（著者の言うように、これからの言語地理学は、隣接意味・用法との関連が重視される方向に進むであろう。著者の先見的提言に敬意を表したい）。特性論は高次方言共時態としてとらえた諸特徴の中から類型的特色を見出そうとするものであり、歴史的法則は言語推移の歴史的法則をとらえようとするものである。第三節～第五節では、以上の著者の方法論的枠組に従って実践例が示される。

第六節では高次共時方言学の発展の方向が示される。高次共時方言学の推進は実践によってなされるべきこと、実践は正確な資料を把握することに意味があること、それゆえに方言調査学の建立が高次共時方言学の発展を予約することを説く。このように、きわめて基本的なことがらがくり返し強く説かれるのは、著者の方言研究の理念にもとづくものである。また、高次共時方言学が人間の言語生活の内面に深くかかわるものであるがゆえに、おのずから言語上の教育論、とくに標準語論を含むことが主張される。

### 結説 方言学の思想

日本のこれまでの方言学史が多く西洋の言語学の模倣あるいは受容適用の歴史であったこと、言語地理学の方法の輸入が方法技術の修得に貢献したけれども、思想的結実は何も

### (38) [書評] 『方言学原論』

もたらさないことを反省する。また、日本語の言語事実を広く見ずに(共通語や東京語のみを見て)言語論が主張されることに不満を表明する。著者の基本主張は「人間言語学としての方言学」であることをあらためて確認し、そのためには文表現論の見地を重視すべきことをくり返し強調する。

本書は次の数行をもって結ばれている。

〈私は、つねに、方法が事実在先だつてはならないと考えている。方法の前に、正確な意味での方法論が自覚されなくてはならないと思う。また、言語の抽象化したとりあげかたは、方言研究上では、だいじではないと考えている。〉

### 三 おわりに

筆者は、本書を読みつつ、現在の日本の方言研究が直面しているさまざまな問題に思いを馳せずにはいられなかった。また、その中で、微力の筆者個人が何をなすべきかについてもいろいろ考えさせられた。それはもちろん、ただちに結論が出せるようなものではないが、ともあれ、そのような根本的な問題をあらためて考えさせてくれる魔力のようなものを本書はもっている。このような書はめったにあるものではない。まさに原論と呼ぶにふさわしい書である。

東条操以来、何人かのすぐれた方言学者がそれぞれの立場から大きな業績をあげ、今日の方言研究の隆盛を導いた。それぞれの方法論は、Aを採ればBが排除されるような性質のものではもちろんない。しかし、著者のように「何のために方言を研究するのか」という最も根源的な問題をつきつめて考えた研究者は他にいないのではないか。

著者の主張は、言語学界のみならず、現代社会の技術主義、分析主義、ならびに専門化の風潮に対する強烈なアンチテーゼである。〈方言研究は人間の発展をこいねがう人間探究の学である。〉このような明快な原理があり、その意味をわれわれが深く問いつつ実践することによって、方言研究に対する、新たな、さまざまなアプローチが可能になるだろう。

(昭和58年5月20日発行 三省堂刊 A5判 311ページ 4800円)

——国立国語研究所室長——

(昭和61年8月11日 受理)